

「千葉地本再建」の失敗を認めた

「動力車新聞」号外(その36)

日刊
動力千葉

80.8.28

No. 519

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二五八・九・(公衆)四五二・二七二〇七

国鉄三五万人体制粉碎、55・10ダイ 改阻止、56・30ジェット闘争を貫徹しよう

～*～*～*～*～
動力「本部」反動分子は、ひさかたぶりに発行した八月二十一日付けの「動力車新聞」号外(その三六)で「佐倉・津田沼・新小岩の各支部を再建」などという大見出しをつけて、あたかも、「千葉地本―支部再建」が進んでいるかのような宣伝を行なっている。

この「号外」は、全国大会のりきりと全国の動力組合員をあざむくためのデマ宣伝にほかならない。

「再建大会」も開かず、当局への「業務再開
通告」のみの「支部再建」?!

まず、「号外」(その三六)は、大見出しで「佐倉・津田沼・新小岩の各支部を相つぎ再建」などといっているが、「いつ・どこで」再建支部大会を開催したのかは、全く明らかにされていない。それもそのはずだ。佐倉の土屋稔などは、われわれの追及の前に、「大会は開かなかつた。集まり(?!?)で選ばれた」などと「支部再建」のデタラメさを自ら認めているのだ。

また、津田沼に至っては、すでに明らかのように、「本部」反動分子の六月二八日、七月五日の二度にわたる「再建」策動が、わが動力千葉の総決起によって完全に粉碎されてしまったのだ。

全国大会までの「千葉地本―支部再建」を策動してきた「本部」反動分子は、こうして「再建支部大会」も開くことができず、ついになりふりかまわず、規約・規則を無視し国鉄当局への「業務再開通告」のみをもって支部が「再建」されたなどといはっているのである。

「号外」(その三六)が発行された日付(八月二十一日付)からしても、八月二十二日から始まった全国大会にやつと間に合わせ、全国大会はもとより、全国の動力組合員をあざむくための全くデタラメなものであることはもはや明らかである。

動力千葉の鋭い追及の前に
逃げまわる動力「本部」反動分子!

さらに、この間、動力千葉は、『日刊』などを通じて「本部」反動分子の規約・規則無視・組合私物化の実態、ファッショ的組合運営などについて鋭く追及すると同時に、国鉄三五万人体制攻撃に屈服し、卒先協力している事実について全国の動力組合員に訴えてきた。

「本部」反動分子は、このわれわれの鋭い追及

と原則的立場と主張に何一つ答えることが出来ず「号外」(その三六)では、「一体全体『千葉動力』の諸君に、動力の規約を云々する資格があるのか。断じて否だ」などと逃げまわっている。つまり、「どうか、われわれのやっていることに口出しをしないでくれ」といいだしたのだ。

「本部」反動分子がいかにわれわれの鋭い追及と正当な主張をおそれ、全国の動力組合員の決起をおそれているのか明らかとなっている。

さらに、「本部」反動分子を追及し、
動力大改革を一層推進しよう!

動力千葉結成以降、一年数ヶ月を経過した今日今だ「千葉地本再建」の目途すらたらず、「再建」されたと称する支部体制は、短期転勤者を除けば、全くの革マル分子かまたは、私利私欲にかられた右翼的弱体分子の集まりにすぎない彼らの実態。

さらに、「本部」においては、予算など全く無視し、組合員の貴重な財産である組合費を湯水のごとく使いはたし、一九七九年度闘争資金会計では、ついに四億六千万円強の未曾有の赤字を出し、それを補てんするために勝手にスト生活資金や第二闘争資金から流用するという前代未聞のデタラメな組合財政運営。そして、全国の組合員からの鋭い追及を恐れ、全国大会直前の「八鉄メモ」の提出。などなど。

「本部」反動分子による動力私物化の事例は、数えあげればキリがない。

しかし、動力大改革をめざすわれわれは、その一つ一つを全国の動力組合員の前に明らかにし、動力千葉とともに総決起することを訴えつづけるであらう。

そして、なによりも、当面する五五・一〇ダイ改阻止・国鉄三五万人体制粉碎、五六・三ジェット闘争貫徹にむけ断固闘い抜こう。